



Title	＜書評＞ジェイ・ダブリン著 ダブリンのデザイン透視図法
Author(s)	増山, 和夫
Citation	デザイン理論. 1971, 10, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53763
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジェイ・ダブリン著

ダブリンのデザイン透視図法

岡田朋二・山内陸平訳

鳳山社発行

“PERSPECTIVE a new system for designers”

一般に人間の思考過程とされている、問題把握—分析—総合—評価の過程は、そのままデザイン過程にあてはめることができる。その各段階において、創造性と論理性とが不可欠である。相対的には、その一連の過程の前半において創造性が重要視され、その後半においては論理性が重要視されると云える。けれども、デザイン過程における創造性と論理性とは、決して明確に分離されるべきものではない。これら創造性と論理性とは、表裏一体のものである。デザインにおける創造は、単に無目的的な創造性のみで成立するものではない。それが合理的、客観的に裏づけされなければならない。それゆえ、上記の諸段階における創造性と論理性とが有機的に結合された形で展開されて始めて、創造的なデザインが成立すると云える。

デザイナーがアイデアを展開する過程は、単にアイデア・スケッチの段階に留めるのではなく、いくつかのフィード・バック・ループを含むデザイン過程全体である。そのアイデア展開の過程で、デザイナーにとって、欠くことのできない技術の一つに透視図法がある。従来、透視図は、その理論的正しさと用器画的方法とが強調されるあまり、単にプレゼンテーションのための道具としてのみ扱われることが多く、デザイナーの意図を第三者に伝えるための手段にすぎないかの如く考えられていた。しかるに、著者もこの本のはじめに述べているように、デザイナー自身にとって、透視図のもつ意味は、単にプレゼンテーションのための道具としてあるばかりでなく、デザイナーが、自分のアイデアを確認し、さらにそれを展開するための大変有用な技術であることを忘れてはならない。

彼は、透視図を二つに分類している。一つは透視図法によるもの、他は、フリー・ハンドによるものである。彼によると、透視図法は主として建築家が、その必要に応じて発展させてきたものが多く、その方法は、建築家のアイデアの展開にあったようになっている。即ち、建築家は、アイデアを平面上で展開することが多い、そして、考えのまとまった段

階で平面図から透視図を描いて行く。ところが、工業デザイナーにとって、平面図はアイデアの展開にはあまり役立たない。デザイナーは全体のイメージについて考えを進めて行かなければならないからである。

そこで彼は、平面図や側面図を必要とする、主に建築を対象とした、複雑で、視覚的誤差の生じやすい従来の透視図法を簡略にして、機器や家具を対象にした、工業デザイナーにとって便利な透視図法について述べている。本書に紹介されている、45°透視図法、30°—60°透視図法、平行透視図法、3点透視図法等は、凡て、従来の図学書に述べられている透視図法については、本来無制限であった、対象物、観察者、画面の諸関係に、視角、大きさ、縮尺の三つの基本的な制限を設けることによって、理論を単純にし、透視図を正確に、かつ、自由に描く方法を工夫して、フリー・ハンドによる描写力を向上させるのに役立つように考えられたものである。それぞれの方法について、例題をあげながら、詳しく、ていねいに理論的な裏づけを行いながら、容易に理解できるように解説している。しかしながら、理論的な正しさだけを追求するのではなく、作図中における、デザイナーとしての熟練した目による観察と、対象物が視覚的に正しく見えることを重視していることを忘れてはならない。

彼が、フリー・ハンドによる作図をマスターして初めて透視図法に熟練したと云えることさえ云っていることから、彼は、フリー・ハンドによる作図を重視しており、アイデア展開のための技術としての透視図法の意味を強調していると云える。

この原著の初版は、すでに1956年に出版されており、1959年には、著者自身、産業工芸試験所の招きで来日し、デザイナーとその造形表現の技術について講演している。その中で、彼は、デザイナーの表現技術としての透視図法について述べている。これを単に第三者に対する表現技術としてのみ理解するのは片手落ちであろう。むしろ彼の強調しているところは、デザイン・センスを向上させるための一手段としてのフリー・ハンド透視図法的重要性であろう。

たとえコンピュータで透視図を描くことが可能であるとしても、デザイナー自身が自分の手で透視図を描くことの意義が軽視されてよいはずがない。フリー・ハンド透視図法の持っているデザイン・センス向上のための手段としての意味を明確にし、強調している点で、この本の持つ意義は大きく、再評価されるべきである。

ややもすればコンピュータの能力が過大評価されかねない今日、デザイナーのより人間的能力の重要性を確認する意味で、この分野での原典とも云える本書が、デザイン教育者としての著者から直接指導を受けられた、岡田、山内両氏による翻訳版として発行された意義は大きい。

京都工芸繊維大学 増山和夫